

大和平野中央田園都市構想
(令和4年度第1回検討会 まとめ)

- ▷テーマ：就学前教育 ～就学前児童のこころと身体のはぐくみ～
- ▷日時；2022年6月30日
- ▷場所：奈良県コンベンションセンター
- ▷講師：東京大学大学院教育学研究科 教授 遠藤 利彦 氏（オンライン参加）
日本総合研究所 上席主任研究員 池本 美香 氏（オンライン参加）
- ▷主な出席者：奈良県荒井知事、川西町小澤町長、三宅町森田町長、田原本町森町長、奈良県立医科大学細井学長、奈良先端科学技術大学院大学塩崎学長、慶應義塾大学矢作名誉教授、スタンフォード大学循環器科池野主任研究員など。

内容：第1回検討会は、「就学前教育 ～就学前児童のこころと身体のはぐくみ」に焦点を置き、議論が展開された。

検討に先立ち、荒井知事から就学前教育の重要性と県が目指す就学前の子どものはぐくみを一層進めるため、「奈良っ子はぐくみ条例」を制定した経緯などが説明された。特に自尊心と人を思いやる利他心の醸成に主眼を置きたいとの意向が示された。

次いで、東京大学大学院教育学研究科 遠藤 利彦 教授が「非認知」なる心の発達と教育—アタッチメントが拓く子どもの未来—と題し、また日本総合研究所 池本 美香 上席主任研究員が「大和平野中央田園都市構想における就学前教育の充実 —海外の取り組みをふまえて—」と題し、それぞれ講演した。

遠藤教授は、従来、子どもの頭の良さは、IQ 値に現れるような「認知能力」をもって議論されてきたが、最近では、むしろ頭のでき以上に、心の大切な力を「非認知能力」として大きくクローズアップされている状況を説明し、幼児期にはぐくむべき心の土台は、「非認知能力」だと見解を述べた。

また、遠藤教授は非認知を、自己と社会性の二つに分けられるとし、自己に関わる心とは、自分を大切にしながら自己をもっと高めようとする力で、自尊心や自尊感情が含まれると語った。一方、社会性に関わる心の力とは、集団の中に溶け込んで人との関係を維持していく力を意味し、利他心も含まれる。この二つを乳幼児期にしっかりと身に付けておくことの重要性を強調した。

さらに、遠藤教授は、こどもの未来を考えるときに子どもに関わる大人たちの重要性を指摘。具体的には、専門的に子どもの保育に関わる保育士や子育て支援の担い手たちの質の向上が欠かせないと説明した。

池本氏は、子育てや子どもに関わる政策全般をリサーチしている立場から就学前教育についての重要性を、ニュージーランドや欧州など海外の事例を交えながら講演した。ようやく、日本も国に子ども家庭庁が設置されるが、海外の事例をヒントに、①全ての子どもたちに質の高い保育を受ける権利をどう保障していくか②親の環境をどう改善していくのか③保育施設以外の環境をどのように改善していくのか—などを、考えていく必要があると提唱した。

討論では、矢作名誉教授が「今回の話を聞いて、世の中に役に立つ人間、すなわち非認知能力の強化のためには、大学からでは手遅れだと感じた」とコメントし、幼児教育の重要性を強調した。さらに「子どもたちを育てるという意味では、育てる本人つまりお母さん本人も幸せでなければならないのではないか。つまり、大和平野中央田園都市構想においては、子育てをするお母さんたちに幸せになってもらえるような施策が望ましい」と付け加えた。

奈良先端科学技術大学院大学の塩崎学長は、「この構想の最大の魅力は、就学前から高齢者まで一生にわたるウェルビーイングの提供というスケールの大きさにある。従って、就学前教育は重要な要素になる」と指摘。また、矢作名誉教授が提唱した新たなイノベーションを起こすためには、大学から人材づくりに取り掛かるというのは「私も遅いと思う」と賛意を示した。

「できれば就学前教育の実験の場を磯城郡3町に整備する意向を示し、遠藤教授も奈良県の取り組みに対し「奈良県独自の形でぜひ進めてほしい」とエールを送ると同時に、実践と同時に効果検証の重要性を説いた。

田原本町・森町長は「就学前教育で、県と磯城郡3町が一体的に連携していくモデルを構築すれば全国初のケースになる」と指摘し、子どもをもつことで社会とのつながる手段にしてもらいたいと希望を述べた。

議論のまとめで荒井知事は、「できれば就学前教育の実験の場を磯城郡3町に整備する」意向を示し、良いはぐくみを行うため、保育士などの担い手の環境整備にも乗り出す意向を示した。